

〔資料紹介〕

大蔵虎明筆 式三番

高桑いづみ

はじめに

例言

式三番

## はじめに

本稿は、山本東次郎家が所蔵する『式三番』の翻刻である。高桑は『芸能の科学』二十八号に東次郎家蔵の狂言伝書『代伝抄』を翻刻したが、その後東次郎師より『式三番』という名の伝書の一部が見つかった、とのご教示をいただいた。『代伝抄』の後半として翻刻紹介した部分は、「四本かゝりの舞様は初日也」と唐突に始まる形であったが、実はこの部分は『式三番』の後半部分だったのである。『代伝抄』と『式三番』は料紙の大きさや材質がまったく同じで、十枚つつ料紙を糸で綴じ、それをノリで張り合わせて一冊にする体裁も同じであるため、ノリがはがれて小冊に分かれた段階で混在してしまっただけらしい。『代伝抄』として翻刻した伝書の途中に「大蔵弥太郎虎時」の署名と花押、印があり、その後白紙が十三丁も続くこと、伝書の末尾に再び「大蔵弥太郎虎明」の署名、花押、印があることから、二十八号でも「別の伝書をあわせて相伝したもの」かと推測していたが、『代伝抄』と『式三番』がまったく別の伝書であること、今回発見された『式三番』と、『代伝抄』として翻刻した後半部分を合わせると、『式三番』の完全版になることが、判明したのである。そこで山本東次郎氏の許可を戴き、改めて『式三番』を翻刻することにした。後半部分は『芸能の科学』二十八号に『代伝抄』として掲載した後半部分と重なるわけだが、内容を明らかにする意味で翻刻し直してみた。

『式三番』については、『わらんべ草』第五段に「翁に八、観世、今春のかわり有、翁の事八別紙にあり」、八十七段末に「式三番の本、一冊にして道倫の奥書あり」と言及されるなど、夙にその存在が予測されていた。今回翻刻する伝書の奥書は「大蔵弥太郎虎明」となっているので、『わらんべ草』がいう道倫（虎清）奥書本とは異なるが、関連の深い本であることは確実であろう。

本書は縦一七六ミリ×横一五五ミリのほぼ枡形本で紺表紙。左上の題箋に「式三番 十二之内」とある。東次郎氏が所蔵する他の虎明伝書も、同じ体裁で「十二之内」と題箋に記したものがあることから、虎明は十二冊の揃い本を意図していた、と考えられる。本書は墨付き五十四丁で片面九〜十行書き。ところどころに朱の書き込みがあり、絵図では足拍子を黒と朱で書き分けている。

内容について、天野文雄が『翁猿楽研究』（一九九五 和泉書院）で翻刻紹介した宮城県図書館伊達文庫蔵『神道秘密翁大事』と比較しておきたい。『神道秘密翁大事』は、大破していた本を桜井彼面が弘化三年四月に書写した、と奥書にあり、式三番の演出、故実、型付、問答の詞章について細かく記したものである。天野は内容からAからRに区分したが、それに倣って今回発見された『式三番』もA〜セに区分し、左記に対照させてみた。『式三番』と比較すると、『神道秘密翁大事』とは冒頭の「A 序的な《翁》説」がまったく異なり、「F」や「R」は「E」・「セ」の後半を欠くこと、「ウ」の一部の記事が「B 翁面をめぐる秘説」として重出し、「O」の絵図数が「ス」より少ない、といった記述の省略が見られる。「セ」の後半を欠くのは原本が大破していた状況を反映したものと考えられるが、「ア」の前半や「エ」の後半は秘事に関することなので、他家への相伝の際に伝授しなかった可能性が考えられる。なによりも、狂言師にとって伝授の中心となるべき三番叟の型付と問答が『神道秘密翁大事』に欠落している点、興味深い。『神道秘密翁大事』の親本を相伝されたのが狂言師ではなかったたので実技に関する記事は書写しなかったのか、弟子家だったたので重要な項目を省いて相伝したのか、いろいろ事情は考えられよう。いずれにせよ、『式三番』には江戸初期の揉ノ段の型付ケと問答が初日から四日目にわたって載っており、資料的価値がきわめて高いと言えよう。「ア」に関しては意味不明な文言や文字が多く、『麗気』など伊勢神道に関わって神仏習合を解いた記述があり、興味深いところだが、今回は翻刻のみにとどめた。

式三番

- ア 神楽巻(『神道秘密翁大事』のCの前に大部の秘事を載せる)
- イ 面箱の大事(Dに同じ)
- ウ 翁道の大事(Eに同じ)
- エ 神道秘密翁之大事(Fに同じ、ただし後半の記事は『神道秘密翁大事』にはなし)
- オ 翁式三番之次第その一(Gに同じ)
- カ 翁式三番之次第その二(Hに同じ)
- キ 翁式三番之次第その三(Iに同じ)
- ク 翁式三番之次第その四(Jに同じ)
- ケ 翁式三番之次第その五(Kに同じ)
- コ 翁式三番之次第その六(Lに同じ)
- サ 千歳之次第(Mに同じ、ただし『神道秘密翁大事』にはない二目目以降の詞章も載せる)
- シ 三番神(『神道秘密翁大事』に記載なし。Nはこの末尾部分)
- ス 仕舞付(Oに同じ、ただし『神道秘密翁大事』より絵図多し)
- セ 諸大事(Q・Rに同じ。ただしRは最後まで載せる)

神道秘密翁大事

- A 序的な《翁》説
- B 翁面をめぐる秘説
- C 神楽巻
- D 面箱の大事
- E 翁道の大事
- F 神道秘密翁大事
- G 金春の《翁》の次第
- H 観世の《翁》の次第
- I 金春勸進能四日目の《翁》の次第
- J 《翁》の異式(その一)
- K 立頭の故実
- L 沓冠の故実等
- M 千歳初日の次第
- N 《翁》の諸秘事
- O 観金《翁》の次第絵図
- P 観金《翁》の差異等
- Q 《翁》の異式演出(その二)
- R 五行説主体の《翁》説

なお、この翻刻は一九九四年から行った「翁」の技法集成の成果の一環である。二十八号に引き続き、今回も翻刻をご快諾くださった山本東次郎氏に感謝申し上げます。また翻刻に当たって、一部小田幸子の協力を得た。

## 例言

- 一、翻字にあたって、表記などは、次項に掲げた点を除き、原本どおりとした。ただし、二行取りの分かち書きは一行に収め、小文字で記した。
- 一、漢字・仮名遣い・送り仮名は、表記の不統一を含めおおむね原本のままとした。旧字体は新字体に、異体字は通行の文字に統一したが、冒頭部分は通行文字がない場合も多いので、原文に従って作字した。また片は「トモ」、「シテ」、与は「ヨリ」と開いた。
- 一、本文の横に、朱で小さく書かれた注記は、ポイントを落として                      の中に収め、墨書の注記は「」に収めた。
- 一、本文冒頭部分、梵字、および絵図は影印の形で掲載した。
- 一、本書を内容から適宜アセに区分し、校訂者の判断で見出しを付した。
- 一、後半の三番型付部分では、詞章を「」でくくった。

式三番 十二之内

神樂卷

禊翁面箱之大事

翁道之大事

神道秘密翁之大事

翁式三番之次第

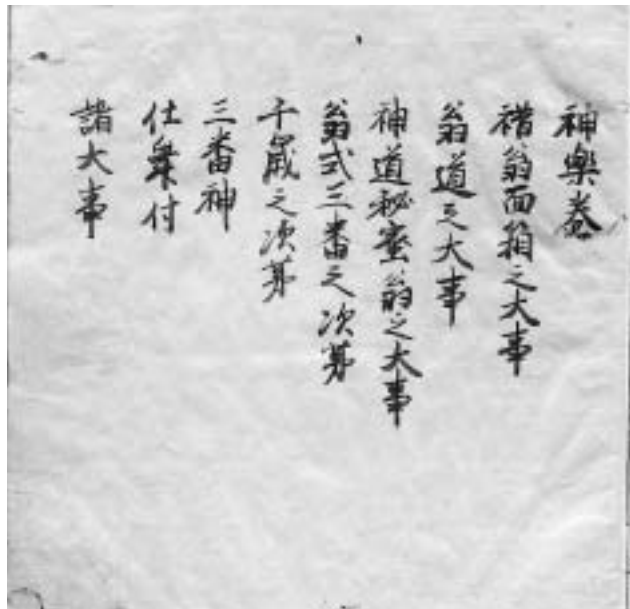
千歳之次第

三番神

仕舞付

諸大事

141 大蔵虎明筆 式三番



ア 序的な《翁》説

神楽卷

凡神楽ノ起リハ有昔シ索菱鳴神奉<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>日<sub>ニ</sub>行<sub>ヒ</sub>甚<sub>ク</sub>无<sub>レ</sub>狀種<sub>ト</sub>陵侮于時天照赫<sub>ニ</sub>怒入<sub>テ</sub>天ノ石窟<sub>ニ</sub>閉<sub>ニ</sub>サシテ警戸<sub>ヲ</sub>而<sub>レ</sub>幽居<sub>ク</sub>、尔乃<sub>チ</sub>六合常闇<sub>ニ</sub>晝夜<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>、</sub>群神<sub>ハ</sub>愁迷<sub>テ</sub>手足<sub>ヲ</sub>閉<sub>シ</sub>凡厥<sub>ノ</sub>事<sub>ヲ</sub>燎燭<sub>ニ</sub>而<sub>、</sub>或<sub>ハ</sub>弃<sub>テ</sub>天御中主神<sub>ヲ</sub>止<sub>シ</sub>由氣皇大神<sub>是</sub>也<sub>ト</sub>太子高皇産靈神命<sub>宣</sub>天会<sub>ニ</sub>八十万神<sub>於</sub>天ノ安河原<sub>ニ</sub>雲漢<sub>是</sub>也<sub>ト</sub>誅思<sub>ヒ</sub>遠<sub>慮</sub>シ<sub>テ</sub>於<sub>ニ</sub>天ノ原窟戸<sub>ノ</sub>前<sub>ニ</sub>拳<sub>ニ</sub>庭火<sub>ヲ</sub>巧<sub>ク</sub>作<sub>、</sub>俳優<sub>ノ</sub>猿女<sub>君</sub>祖<sub>天</sub>鈿女<sub>命</sub>探<sub>テ</sub>天<sub>ノ</sub>香山<sub>ニ</sub>竹<sub>ノ</sub>其<sub>ノ</sub>節<sub>ノ</sub>間<sub>ニ</sub>離<sub>ニ</sub>風<sub>ノ</sub>孔<sub>ノ</sub>通<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>氣<sub>今</sub>世号<sub>ハ</sub>節<sub>類</sub>是<sub>ナリ</sub>亦<sub>テ</sub>天<sub>ノ</sub>香<sub>ヲ</sub>引<sub>テ</sub>奥<sub>ク</sub>亦<sub>レ</sub>叩<sub>レ</sub>伎<sub>ヲ</sub>今<sub>世</sub>琴<sub>其</sub>調<sub>レ</sub>和<sub>縁</sub>也<sub>ト</sub>木<sub>木</sub>合<sub>合</sub>而<sub>備</sub>安<sub>楽</sub>ノ<sub>声</sub>ハ<sub>移</sub>シ<sub>和</sub>風<sub>ヲ</sub>頭<sub>ニ</sub>入<sub>音</sub>即<sub>猿</sub>女<sub>神</sub>伸<sub>手</sub>猶<sub>レ</sub>声<sub>ヲ</sub>或<sub>ハ</sub>歌<sub>ヒ</sub>舞<sub>ヲ</sub>頭<sub>ニ</sub>清<sub>淨</sub>ノ<sub>音</sub>之<sub>妙</sub>復<sub>風</sub>塵<sub>ヲ</sub>以<sub>来</sub>風<sub>雨</sub>ヲ<sub>時</sub>若<sub>日</sub>月<sub>全</sub>ク<sub>度</sub>ア<sub>リ</sub>一<sub>陰</sub>一<sub>陽</sub>万<sub>物</sub>之<sub>始</sub>メ<sub>也</sub>

一音<sub>一</sub>声<sub>一</sub>万<sub>一</sub>楽<sub>一</sub>之<sub>一</sub>基<sub>ト</sub>也<sub>ト</sub>神<sub>道</sub>之<sub>奥</sub>轄<sub>ニ</sub>天<sub>地</sub>之<sub>靈</sub>粹<sub>ニ</sub>糸<sub>竹</sub>之<sub>要</sub>八<sub>音</sub>之<sub>曲</sub>已<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>為<sub>ス</sub>貴<sub>ト</sub>シ<sub>故</sub>ニ<sub>依</sub>舊<sub>氏</sub>之<sub>權</sub>猿<sub>女</sub>氏<sub>率</sub>来<sub>目</sub>命<sub>孫</sub>長<sub>倉</sub>ノ<sub>男</sub>女<sub>転</sub>ニ<sub>神</sub>代<sub>之</sub>遺<sub>跡</sub>ヲ<sub>而</sub>供<sub>シ</sub>テ<sub>三</sub>節<sub>祭</sub>ノ<sub>永</sub>ク<sub>為</sub>後<sub>例</sub>ト<sub>也</sub>

一 阿波良波命傳曰 人長者猿女君祖天鈿女命也 高



貴<sub>尊</sub>勅<sub>命</sub>負<sub>沖</sub>天<sub>氣</sub>宇<sub>ト</sub>即<sub>時</sub>八<sub>百</sub>万<sub>神</sub>等<sub>集</sub>会<sub>シ</sub>テ<sub>坐</sub>シ<sub>故</sub>ニ<sub>手</sub>持<sub>名</sub>之<sub>沖</sub>也<sub>古</sub>語<sub>ハ</sub>羅<sub>婆</sub> 御<sub>笛</sub>神<sub>ハ</sub>善<sub>龍</sub>王<sub>探</sub>テ<sub>天</sub>ノ<sub>香</sub>山<sub>金</sub>竹<sub>ヲ</sub>其<sub>ノ</sub>空<sub>ナル</sub>節<sub>ノ</sub>間<sub>ニ</sub>離<sub>風</sub>孔<sub>ヲ</sub>融<sub>通</sub>シ<sub>和</sub>氣<sub>ヲ</sub>一<sub>枕</sub>安<sub>楽</sub>ノ<sub>声</sub>ヲ<sub>御</sub>歌<sub>神</sub>本<sub>声</sub>曲<sub>ハ</sub>天<sub>兒</sub>屋<sub>命</sub>未<sub>音</sub>曲<sub>ハ</sub>太<sub>玉</sub>命

一 日本書記曰今ノ先驅神在<sub>ル</sub>之<sub>九</sub>衢<sub>ハ</sub>ノ<sub>衢</sub>ト<sub>云</sub>フ<sub>ハ</sub>天<sub>上</sub>ノ



雲路也 号ニ道祖神ト七咫ハ八寸ヲ咫ト云七八五十六也 五尺六寸ノ鼻也 一儀ニ且七八寸鼻ト云 背ハセナカ也 七尺也 尋ハ八尺七尺アマリト云 則ハ尺用ニ是五丈六尺ノ義ニテハ无シ纂六有ニ五丈六尺ニミルハ惡キトアソバイタゾ吉田ノ家五尺六寸鼻五丈六尺背トミタガヨイトアソハイタリ其故ニ化生神イカ程有アリ 其タ、大ナトミタカヨキ也 尻シリゾ眼ノ赤事鏡ヤウテ朱ヲコキ入タ 是カ赤キ酸ニ醬、コトク也

是神宮ニテハ置王神ト云神ニ御座ス猿田彦ノ神是也 此神天照大神之变化ノ神也 今世神行神輿渡リ祭祀ナドノ時王鼻ト云面ヲ着テ先ニネルワ是ヨリ始事也 是前ヘイカシタ程ニ神代迷風ノコイタ体也 八百万神達目ヲエトリ合セラレ又程ニ靈駿 甚多キ神也 天細女命アレハ目カ勝レタ神ナリ 行問宣女体ナレトモ強情神祭舞楽岩戸ノ前ニテラドツ夕神也

一 或書曰 用明天皇ノ太子ヲ聖德太子 推古天 御宇ニ厩戸ノ皇子始テ我朝神代ニ仏法ノ名字聞ザリシニ太子崇貴ニ給ヒヨリ弘今ニ至マテ盛ナリ 仏法トテ人ノニツテ如クメグリテ互ニ擁護シテ闕事ナシ 宝祚延長仏法威シカ

ナル故ニ百王守護ノ神明皆内證ハ仏菩薩化現ニテハ東漸已前ニ比理神代ヨリアリケリ、覺ユル也 一ニ時聖德太子彼神代遺風ノ祖神猿田ノ神ノ面ヲ作テ号ニ名王舞神事、楽等不レ絶其ノ体古今ニ傳ヘ給フ事太子ノ御恩德也 又氏安ヨリ相伝ノ鬼面ト云ハ猿田神也 或ル説ニ曰 春日大明神ノ御影ヲ奉レ移儀也何モ兩説在レ之 其後弘法大師入唐為ニ御願成就ノ弁才天ノ御像ヲ七面ノ翁悉等ニ奉レ移給也 則聖德太子空海ト御師造、元祖是也 故ニ伊勢春日住吉刀辛雄或太神奉レ崇儀也家々秘傳心得謂レ有レ之不レ驗レ之ヲ或ハ一身分身同体異名是也

一 麗氣曰 伊勢津彦ノ神石屈亦春日ノ戸神靈屈也 惣名高倉山是也 常ニ天童天女垂テ白雲ヲ臨遊シテ松柏ノ本ニ奏ニ妙音ノ天樂ヲ于レ時心響傍テ山ニ名ニ風音ト也 彼風音一嶽丹白鍬鼓金銀面象笛宝鈴等藏ル之ヲ是天女大和姫神ノ態也云々山田ガ原造宮之間沼木高原離宮木丸殿御坐天衆降居奏ニ歌舞妙音ノ樂云々 興佐宮御出時地主明神詠曰 業具身爾奈具移宮伊豆間今波照出御明給

一 弘法大師ノ无題記ニ曰ク 其ノ翁ハ天照太神御形尊神ト内宮外宮ニ鎮護ヨリ域ニ示シテ金界胎界ヲ以テ止開ニテ月殿ニ思フ心城本位之聖衆者ノハ清淨妙音ノ風曲等大小神遊當宮

所屬ノ眷神也 故ニ面ハ本跡明神 舞人ノ垂迹明神也  
神鈴者從ニ大梵天宮ノ流鈴心化神ノ持テ玉ヲ 金剛宝鈴也 化  
身說法ノ音ハ表ニ五十鈴ノ宮処ニ是レ其ノ縁也 金器ノ中ニ有リ  
音声一廿八口也 是レ一口同音兩部同音諸仏 同音五智  
五阿 不二妙躰也 諸神同輪亦 如是 又大日尊之舌  
声是也 此鈴五ツ異名アリ 別紙記也

五段ノ神樂祈願密意ノ事 一 諸神大歡喜十一別宮神樂段  
是也 二 天人地和合ノ神樂段是レ 三 慈悲信心不二ノ神  
樂ノ段是レ 四 福德愛敬人養神樂ノ段是也 五 天長地久  
子孫繁昌 陰陽和合 世上豐穰 如意安穩ノ神樂ノ大事是

也 又今世反閉行ノ神樂ハ大裏吉田大山北ノ農 何ノ庭上ノ  
神事ニモ用フ之ヲ 自ニ神代ノ神道ノ大極ノ橋々相イ受ケ他又左ヘ  
廻ハ陰神 右ヘ廻陽神ト云心也 タトヘハ一念惡積離散心  
也 又八乙ニ天津乙女子其外四人 名ニ神人 一メツ  
クラトメ 二ナカツラビメ 三詞ビメ 四ニ舞姫 五カ  
ウバシ姫 六花ヤ姫 七アカル姫 八カヌル姫 又四人

トハ 一ナナキ姫 二結姫 三ツラネ姫 四ヌノ姫也  
笛大小ノ鼓大鼓 五調子 五大龍王 五明菩薩 五季  
五臟 五音 表ニ同音ニ八百万ノ神達神歌ヲ 又諸仏陀羅尼

唱給心也 大夫ノ一音ハ神明初ニハ言フ諸法心地万行之源也  
鼓笛天靈幡地靈歌舞人靈 三才ヲ以テ神ノ祭也故 頌ニシテ曰  
明々神明床ニハ催ニ肝膽之志ヲ 励ニ管絃歌舞ヲ遊宴ノ情觀レ之  
馨々ト鳴ル鼓ノ響ニ 醒ス五衰三熱ヲ 醉ニ 朔々振鈴ノ音驚ス  
生死長夜ノ昧ヲ 以上文

イ 面箱の大事 襟翁面箱大事 先護身法而向可ニ蓋開ク時者  
神ノ御戸挑々ト觀念スヘシ

文ニ云 是諸衆生聞是法已亦得闍法 飯闍法為 是則金  
胎不二ノ乳字一體ノ儀也 復父々ノ助者二十八宿之中ノ牛  
宿也 本地是レ藥師初面是則天照太神宮更ニ春日大明ノ神  
託云 三輪ノ明神吾カ父ハ是面形 母ハ是此箱ノ緒是ナリ 陰  
陽結フノ神ノ形也 千歳ノ人者 人間八苦天上ノ五衰ノ苦ヲ 弘  
儀也

一切衆生悉ク々機天々ムコト 皆是和朝受ルニ生依也 知  
ト不レト知ラ 三毒ヲ欲ク雖唯スト 一ツ心ニナリ守ル所皆是神明  
ノ恩也 何レノ心モ清淨ニ成舜遊ハ可者也 若シ不淨成リテ輩

者ハ 飯テ当ル罰也 可秘々々

ウ 翁道之大事

翁道之大事

抑奉ニルハ彼御面ト申一者、三国相応天地和合陰陽夫婦別而

者一 天太平四海静謐諸人快樂福寿円満之術法也

一 父丞之面者天竺ニテハ淨飯大王也

一 翁之面ハ飛行男老行女ヨリ奉レ申也

一 黒色ノ面ハ正覺無漏ノ本体也

一 男之面ハフクラシヤウジユ也 悉達太子ノ昔ノ御顔也

唐土ニテハ三神王

一 黒色ノ面ハ神農皇帝

一 父ノ丞ノ面ハ軒轅皇帝 福王神也

一 色男ノ面ハ快樂自在ノ神瓊瑤荒神也

我朝ニテ

一 翁ノ御面ハ忝モ日本ノ主シ天照大神大日靈玉ノ尊ト也

一 父ノ丞ノ面ハ豊蘆原ノ千五百番ノ親神也

一 黒色ノ面ハ大黒殿也

又云

一 翁ノ面ハ本地尺迦如来

一 千歳ハ八幡大菩薩本地弥陀如来

一 三番神ハ春日大明神本地ハ觀世音菩薩

一 御面ノ緒ノ長サ一尺二寸七分ナリ

緒ノ色ノ定リ

一 廿迄ハ面ノ緒 可レ白ス

一 廿一ヨリ廿迄ハ 薄赤シ

一 廿一ヨリ四十迄ハ 黄色也

一 從四十一五十迄ハ 可レ黒ス

一 自五十一百迄ハ 可黄色

加様ニ心得而可レ秘十年ニ一度替ル也

御面

一 御面ノ御顔ノ内額ノ皺ノ上ハ五天竺

一 鼻筋ノ上ハ上界

一 右ノ眸ノ額ノ脇ハ須弥山

一 左ノ眸ノ額ノ脇ハ金剛山光明山

一 御面ノ眼ノ下左ハ日天

一 御面ノ眼ノ下右ハ月天

一 御鬚上ハ沙羅林

一 中八靈鷲山

一 下ノ御鬚ハ曼陀羅

一 閉レ 頤事上ノ広ハ天ニ下ノ迫ハ地也 其中ノ御口ヲ定ム内海ト也

海ト也

一、二ツノ鈎緒ハ難陀竜王跋難陀竜王是又海之主也

一、天地之間ニ滄溟海ト云有海 御面ノ口則滄溟海也 彼

ノ海ヲ此竜依テ守護スルニ天地一ツニ不成海ト天 堅 世

静ニ治ルコト偏ニ此ニ竜ノ業ヲテリ表レテ是ヲ閉ルナリ 左ハ難陀竜王

右ハ跋難陀竜王 難陀竜王 跋難陀ハ青キ竜王也

一 御面ノ緒ハ則天照太神蛇体ノ御時ノ御顔 緒ハハ角ナリ 左ノ

角ハ戒定恵ノ三法也 右ノ角ハ 空仮中ノ諦也 可レ

秘々々

一 九足ヘンバイ七足ヘンバイ

一 シホルクノコルノソワカラホトク南無皈命日天神

本地觀世音慈眼大明神清淨安隱ノ今日ノ御祈祷ト当 泰

平云々

先無所不至 丸ニハ丸ト座敷ニ居 各々座中ニ着ス 笛エ

ツノ三五調子吹 是則五仏ノ表相三種ノ神器ノ次第也

一、次ニ大夫初百々翁々々羅修羅刹等我翁供ニ神名ニ

一、次座中同音如是唱ヘシ 是則天照太神宮 本地真言

垂迹也 式ニ番諦儀者過去現在未來 初千歳ノ人者ニ

一字 面箱者三世不可得ノ一利納ニ両部不二面也 大夫ト

者垂迹明神 面ハ本迹神明也 夫一切衆生者佛法ニ字

隱欲皆ヲ魔界ニ人処天照太神以テ御方便ヲ假ニ名ニ猿樂ト

愚痴凡人ヲ引導シ給フ更ニ天台花藏界樂屋者母ノ胎内ニ籠意

也 橋懸ト者父母胸四ツノギボシハ母ノ乳房勢至觀音本迹

也 武体ハ是護摩ノ道端也 亦ニ番躬ノ御神樂一人之故七

難ヲ払也 此時ハ小爐ニ三カラ大爐一カラ笛合テ五人也 是

五人ノ神樂男心神之躰也 故一度神前ニ翁面ヲ奉ニハ当ニ諸

神ニ給フ

右大般若波羅蜜ト唱ル音ノ調子ト亦百々翁ト同調子可レ

秘々々

右翁之秘事ノ本依有虫食喜清之代ニ選旃書改者也

工 神道秘密翁大事

神道秘密翁大事

才 翁式ニ番之次第その一

式三番之次第今春

一 御面箱千歳持出ル プタイノマンナカ ワキジヤウ  
 メンノカタヘスコシヨリ 左ヒサヲタテ大夫ノ礼ノ間ツ  
 クバイテ待テ 大夫ワキノ座ヘナヲリトウド居ルヲ見テ面箱  
 大夫ノ前ニ置キ緒ヲトキ翁ノ面取出シフタヲアヲノケ其上ニ  
 置ク コシヨリ扇ヲヌキ出シ大夫ノ上ニナヲリ居ル面箱ヲ  
 持出ル時ヒタ、レノ露ヲ取ル 面箱ノ緒大夫ノ足ニカ、リソ  
 口ヘ八千歳ノヲチド也 モミノ段通て 鈴渡シ楽屋ニ入立ツ所ハ笛ニ  
 ノヒシギ

二番ニ大夫出ル

三番ニ三番申樂出ル 大夫ノ礼ノ間橋カ、リ シテ柱ヨ  
 リ一間アヱタヲ置キツククバイテ 待 千歳大夫ノ上ニナヲル  
 時シテ柱ノ本ヘナヲリツククバイ居テ神道ノ唱 口伝 大  
 夫「座ニ居タレドモマイラウ蓮花リヤトンドヤ」トイフ  
 テ出ル時三番入カワリ タイコウチノ方ヘヒツコミエボ  
 シヌギ替ヘヒタ、レノウシロヲハナシ チササ刀ヌキ黒  
 色ノ面請取神道口ニ伝面ヲフトコロヘ入レムカウノカタヘ座  
 シテ居ル 大夫楽屋ヘ入ニ三番ニマウ

一 第二天照太神 翁舞連ぬし殿 守久神春日末社

一 第一八幡大菩薩 千歳 鈴ノ大夫殿  
 一 第三春日大明神 三番神 神樂ノ大将 春日末社 樂大  
 夫殿

カ 翁式三番之次第その二

觀世式三番之次第

一、御面箱持  
 二、大夫  
 三、千歳 ツレ

四番ニ三番申樂

大夫礼ノ間千歳シテ柱ノ本ニ座シ 面箱ノ緒ヲトク内ニ千  
 歳大夫ノ上座ニナナル 面箱持ハ大夫ト千歳トノ間ニナナル  
 上座千歳 中座面箱持 下座大夫

三番ニハ大夫ノ礼ノ間ハシガ、リ居テ 千歳上座ヘナナル  
 ト其マ、イリカワリ シテ柱ノ本ニ居ル 大夫「座ニ居タ  
 レトモマイラウ蓮花リヤトンドヤ チハヤフル神ノ彦サ  
 ノ昔ヨリワガ子ノ所久シカレトゾイワイ サイフアリ ソヨ  
 ヤリィチヤトンドヤ」ト云時イリカワリタイコウチノ  
 イル所ニ座シコシラヘル

大夫楽屋へ入ル時千歳大夫ノ跡<sup>ニ</sup>其マ、イル

面箱持鈴渡<sup>シ</sup> モトノザニナホリ ス<sup>ノ</sup>段過テ三番三アト二

入ル

一 天照太神 翁大夫

一 千歳歴 春日大明神

一 三番申雅久 住吉大明神

右此三番法花経ノ序分正宗分流通分の三段也 カミカ、リ

ニハカクノコトク

一 皮々く々叱囉哩々々々囉

叱囉哩囉稚喇囉々々喇効々

一 底哩耶叱囉哩叱囉哩囉

叱囉哩囉稚囉哩囉々々哩効々

所千代まで御座 マセ 我等も モ 千秋候 ハン 鶴と亀との

齡にて、幸祐意に任たり

とふく たら里々々々らりら々里とふ ちりやたら

里々々ら、里らたり、ら々里とふ

徳省耶頓々耶、比廬婆賀喇々頓々耶 座して居たれと

モ 参蓮花利耶頓々耶

千磐破 神の彦佐の 昔ヨリ 久しかれとは祝 ソ

驚破々理智耶 以上

凡諸千年の鵠八、万歳楽とつたふたり、又万代の池の

亀八、甲に三玉を備たり、渚の沙、諷々と敷て朝の日の

色日曬々し、滝の水冷々と落夜<sup>ノ</sup>の月鮮に浮たり、天下泰

平国土安穩の、今日の御祈祷なり、あり八らや耶何所の

翁共

あれは何所の翁共、そや何の翁共、そや 千秋万歳の、

祝の舞なれ八、一まいまはふ万歳楽々々々、御見耶 京

かゝり八子細帯でもミノ段少しつか也

キ 翁式三番之次第その三

今春大夫勸進能に八かくのことく

四日目次第ちかい候

大夫なる八たきの水く 日八てるとも 地たへずとつたり

ありうどふくくどう 大夫たへずとふたり なる八たきの

水日八てるとも 笛ひしぎてせんざい出る也 是八勸進

能之時のこと也 御前に八なし 大夫此次第の時せんざ

いの次第四日目のけふがる松かなく おがの松是也 け

ふがる松かなの次第之時八所ちよまで云也、初日二帰る



一 くつかふりと云ハ三番三のとのめの時 笛ひやうつり  
 ひうろ ほつはいひうろひつととまり 笛のほつはいの  
 時<sup>く</sup>かしらニツひうろの時かしらニツ 後のとのめの時  
 ひつととまる時かしら一ツ 以上合かしら五ツなり ま  
 へのたちがしらも五ツ也 能の五段の舞の時 此五ツの  
 かしらかならず四段目か五段めに八打と道知申され候也

色々口伝有

一 笛のくつかふりと云事 ミづと云ハ 三番三のまひ  
 出すかゝりにミせてをく也 それをミてとむるなり か  
 やうの事笛ふきしらぬなり ひすべしく

一 くつかふりと云ハ はしめ舞出し 左右へま八れ八  
 とめにも其ごとくとむる也 一まわりはじめにま八れ八  
 とめも一まハリ はじめにとめをミせてをく 是をくつ  
 かむりのまいやうと云也 口伝

一 すゞ小つゝ見につく事 いんやうの心もち有 大  
 つゝミ八陽也 かるがゆへに男につく さあるによつて  
 もミの段八大つゝミのかしらよりひやうしふミ出す事な  
 らひ也 急八陽

一 すゞ小つゝミにつく事 小つゝミぬんに取故也 も

ミの段陽 すゞの段陰と定る也 序八陰

一 せんさいふる寿命の舞也 千歳経<sup>ズ</sup>とかく文字にい  
 われ有「神道二八振下書也」

一 黒色の面 右に書ごとく 其内春日の神赤 住吉

大墨殿 比沙門天王 不動明王 取様色々口伝有

一 じよはつきうの事 万事<sup>ニ</sup>在之

一 千歳の舞八波

一 もミの段八急

一 すゞの段八黒色の面 ぜうの面なる故ニ序之舞也  
 さあるに依て式三番八破急序と定る也

一 四本かゝりの舞様は初日也

一 出羽之心持 楽屋母の躰内 まくはなるゝ処出生也  
 さあるに依てまくを横まくにする事子細有之 まくをあ  
 げごとくく出すと 三尺置てまくをおるす事ならいあ  
 り

一 七五三之拍子 五々三の拍子 へんばいの拍子習有

口伝。

一 身を分る習あり 口伝

一 三番三して柱に座して居る時 舞台を見合る事肝要



也 鼓打の顔にひたゝれの袖かまわぬやうに舞べき事肝  
要也

サ 「千歳」の次第

千歳初日 面箱持出ル時目八分也

大夫座二着 笛座付吹 小つゝみ打出す

大夫 どうくたらりくら たらりらがりらりどう

地 ちりやたらりくら たらりらかりらりどう 大夫

所千代までをはしませ 地 我等も千秋候はん 大夫 鶴と亀

との齡にて 地 幸心に任たり 大夫 どうくたらりたらり

ら 地 ちりやたらりくら たらりらかりらりどう

笛ひしぎ 小つゝみ たつほくと 三下 打時扇巻はじ つゝ

ミ打のまへに立て わき上面のかたへむいて「なる八た

きの水 く」と云時 左の露から取 右両のつゆを取

「日八てるとも」と云時向ひへ向口伝有田にたとゆ 地「た

へずとをたりありうどうく」と云時 ぶたいの真中の

方へ出 足一ツ開セ「たへずとほたり々々く」と

云て つゝみの頭に付 跡へ一足ツゝ引 とつどりの

つゝみ打のまへまで引 拍子右にて一ツぶミ候 其拍子

八ひにくの拍子也 扱たつはい 身をわくる子細祝言袖

打こミ 左のそで打返し其時足八右より先へ出す也 扱

右の手をさしのべて扇子目よりたかくさし上 一遍左へ

まハリ あぶぎ左へ取（鼓打一人間に）こまハリ一ツ 右

の袖打こむ さて左の手指上 あぶぎ目よりたかくさし

上 右へこまハリ一ツする内（鼓打の方へ向） 右へあぶぎ

を取 たつはいの心得にて又左へあぶぎを取時拍子三

つたたた （扇子）目の通さし上「所千代までを八しませ

我等も」と云時左の足手を引 あぶぎ共二引 右を打こ

ミ「せんしう候はん なる八たきの水」と云時 又初の

ことくつゆを取ル「日八てる共」と云時向へむかふ地

「たへすとをたり ありうどう く」向へ行 又跡へす

さり候 右よりはやく「どうく」と云時 鼓打のま

へくる程に足を引 舞 又たつはいすらりとして右の

ことく又拍子たみ 左の袖返手ヲノへ 扇ひろげ一遍大廻

まへのことく あぶぎ左へ取 こ廻り一遍 右の袖打こ

ミ 左のあぶぎ足共に左へふミ出し 左の扇足引あぶ

ぎ返欠し はしめの舞出「ことく つゝみ打の前 脇上面

へむひて 拍子一ツぶミとめ候て あぶきすすめ もと

の座ニ 大夫のうへになをり候也

初之拍子右ナラハトメモ右

左ナラハトメモ左 左右ニ習有

二日

鶴八千歳経 く 君八いかゞふる

君はいかゞと云時 貴人の

ミるならいあり

地万歳こそ経ありうどつく く 万歳こそ経れく

君の千歳をへん事も あまつ乙女の羽衣よ 鶴八千歳ふ

る 君八いかゞふる

地万歳こそふれありうどつく く

三日

ばんぜいませませ く いわぶが上

地亀や住なりありうどつく く かめやすむなりく

君の千年をへん事も あまつ乙女の羽衣よ ばんぜいま

ませいわぶがうへ

地亀やすむむならありうどつく く

四日

きよぶがる松かな く をがの松

地住吉のまつありうどつく く すみよしのまつく

所千代までお八しませ、我等も千秋候はん、きよぶがる

まつ哉おがの松

地住吉の松ありうどつく く

千歳何も四日の心得有べし 祝言 わたまし 神前

御前遊見 口伝有也

シ「三番神」「三番三 初日の型付と問答」

三番三初日

大鼓三段打 立出 して柱より間半ほどさきへ出 足を

ふミとめて「はあゝ おさへくあふ よるこひありや

よるこひのあふぎ上面へ指二遍 後 「よるこひありや

と云時に脇上面へ向 あふぎをさし「わがこの所より

たいはい ほかへハやらしと思ふ」 たいはい つゆを取

左へ一遍こまハリして上面へ向 両袖打返 つゞみ

頭 笛 拍子ふみさきへ出 跡へ 拍子 返り 左へ二返

こまハリして又両袖打返 シ 大まハリに二返 鼓打

二人の真中にて小廻二ツして右のそで打こみ 左へ拍子

有 左の袖打返 右へ廻 又ツゝミ打の前にて小廻二返  
 して左のそでうちこミ 右へ拍子ふミ左へ 大廻 ツゝ  
 ミ打の前にて小廻二ツ ぬき拍子にて左へ行 左の袖打  
 返シ 右へ 大廻 (拍子にて) 又ツゝミ打の前にて小  
 廻二ツ からず拍子にて右の目付の柱へ行 右の袖を返  
 左へまはり 又ツゝミ打の前にて小廻二ツ 少先へ出真中  
 両袖打こミ右へ行 拍子 左へ廻 小廻二ツして左の袖  
 をるし 右へ 行 小廻二ツ 右のそでをるし左へ 大廻又  
 ツゝミ打の前にて小廻二ツ 両袖 かたくツゝ 打返 真  
 中にて拍子にてとめ 同じごとく (面ヲキテ) 「あらめ  
 てたや な、物に心得たる、あとの くつゆとる 大夫殿  
 にげんざう申さつ」千歳「ちやうどまいつて候」「たが御  
 たちにて候ぞ」「あどゝ仰候程にずいぶん物に心得たる  
 あど まかりたつて候」「今日の御きたうを めでたい  
 やうにまふてなりそいぜう殿」「此色のくろい丞が今日  
 の御きたうを めでたいやうにまいおさ見つづる事はや  
 すう候 まつあどの大夫殿八もとのざしきへ 扇子指  
 おもくと御なをり候へ」「それがしがざしきになをら  
 ぶずる事八ぜう殿の御舞よりもやすう候 たゞ御まい候

へ」「いや御なをり候へ」「さら八ずをまいらせう」  
 「あちやうがましや候」

シ 「三番神」(三番三 二日の型付と問答・烏帽子)

二日

「はあゝおさへくあふ よろこびありや (上面向)」  
 と云時に脇上面向 扇子をさし「わがこの所より」と云  
 時に左のつゆを取 左へ廻 「外へ八やらじ」と云時に  
 右のつゆを取 左へ廻り 「思ふ」と云時に両袖打返也  
 つゝミのかしら有 笛吹出し 拍子先へふミ出 初日の  
 ごとくあとへ拍子ふミもとる 小廻二返 両のそで打返  
 し大廻二廻つゝミ打の前にて両袖打返し 左へ拍子にて  
 行 右へ廻廻マ 左の袖打こミ 右の手をさしのべて右の  
 そで打返 右へ廻 つゝミ打のまへにて小廻二ツ 又両  
 袖打返 右へ行 拍子有 左へ廻 右のそで打こミ右へ  
 廻 左のそで打こミ拍子少 左へ 大廻 つゝミ打のま  
 へにて小廻 左へぬき拍子にて行 左の袖返 よこに拍  
 子少 右へ大廻 鼓打の前にて小廻 右へからず拍子に  
 て行 右のそで返 左へ 大廻 又つゝミ打の前にて小

廻 真中にて両袖打こむ 是から八初日のことく とめ  
 左へ小廻 左の袖返 右へ小廻り 右の袖返 真中へ  
 拍子 「ほつはい ひつろ ひツ」と云時両袖返す也  
 口伝有 面キテ「あらめてたや 物に心得たるあとの  
くっゆ取 大夫殿にげんざう申さう」「ちやうど参て候」  
 「あどくこふ所にはやく」おたち祝着申て候 さて  
 あどの大夫殿にふしんを申度事の候よ」「それ八いかや  
 うなる事にて候ぞ」「只今翁の大夫殿のめしたるゑほし  
 八何と申ゑほしにて候ぞ」「あれはたてゑほしと申候よ」  
 「さて又あどの大夫殿のめされたるゑほし はやしの衆  
 のきられたるゑほしハ 何と申ゑほしにて候ぞ」「是ハ  
 折ゑほしと申候」「立ゑほし おりゑほし 是ハ一段め  
 でたきゑほしにて候程に さあらハ此ゑほしをいわふて  
 まいらせうするが 何とこざあらうするぞ」「それハ一  
 段祝着申て候 いかやうにもいわふて給ハり候へ」「四  
 はうにすまんの威をたてゑほし その中にとぶど折ゑほ  
 し なんほつめでたきゑほしにて八候八ぬか」「御いわ  
 ひ近此祝着申て候 又ぜう殿に不審を申度事の候よ」  
 「それ八いかやうなる御事にて候ぞ」「さいぜん翁の大夫

殿のめしたるゑほしにもかわり あどの大夫はやしの衆  
 のきられたるゑほしにもかわり ぜう殿のゑほし八何と  
 やらん、しやうぎの馬のなりのやうに候が それ八何と  
 申ゑほしにて候ぞ」「是こそ一段めてたきゑほしにて候」  
 「何と申ゑほしにて候ぞ」「ものと申」「何と」「天下おさ  
 まりめてたいおりからなれば しつち まんぼつのたか  
 らが天よりも此御てんへ ふらりくとふりゑほしにて  
 候」「あらめてたや さあらハすをまいらせう」「あら  
 やうがましや候」

シ 「三番神」(三番三 二日の替の型と問答・子玉)

二日橋かゝり 鼓三段目に立して柱より間半出

「はあくおさへくをふ よろこひありや く わが  
 この所より」と云時たいはい つゆ取 左右へこまハリ  
 「外へハやらじとぞ思ふ」つゆを取 両打こむ(大つみ後の  
かしらよりふみいだす口伝) 拍子をふみさきへ行 跡へかへり  
 こまハリして両そで打返し 大廻りに二返 鼓打のまへ  
 にてこまハリ二返程して両そで打返 左へ拍子ふみ行  
 右へ小廻り二ツして左のそでを打こみ 手ヲのへ 右袖を

返し 大まハりに右へはしがりの一の松のきわまで行  
 まハリする内左のそでをおろし 左へまハリ右の袖打こ  
 ミ、又右へまハリ 左の袖打こミ拍子有 又左へまハリ左  
 をおろし右へまハリ右をおろし ぶたい中へ大まハリ左へ  
 也 さてつゝミ打のまへにてこ廻りニツありて両袖打こミ  
真中へ 拍子少有 間半程出小廻りニツ ぬき拍子にて左へ  
 行 左の袖おろし、大まわりに右へまハリ つゝミ打の前  
 にてこまハリニツ からす拍子にて右へ行 右の袖おろし  
 左へ大廻りしてつゝミうちの前にて小廻りニツして左のそ  
 で打返し 右へこまハリニツ 右の袖打返し拍子にてぶた  
 いのまん中にてとめ候時両袖打返ッ おさめのそでの返  
 しつねとちがふ いつもおさめのそでの返しやう八おなじ  
 ことく 口伝有 つねのことくまへかと 「あつゝこう所にはや  
 くとおたち 祝着申て候 さる程にあとの大夫殿に少申  
 度事の候よ」「それハいかやうなる御事にて候ぞ」「そうし  
 て人間のたからの内に別而てうほつたるたから八何にて御  
 さあらつづるぞ 承度候」「されハその事にて候 誠しつ  
 ち万ほつのためからのうちに別而てうほつたるもの八子たか  
 らにて御座あらつづるとの申事にて候」「あぶ尤 われら

もさやうにうけ給及て候 それに付此いろのくろいぜつ八  
 ことさらめたいものにて候 子徳人にて子をあまたもち  
 申て候よ」「それ八近比めてたき御事にて候 いか程もち  
 せられて候ぞ」「かミ五人八おしならべてなんし 下五人  
 八おしならへて女子 この子共かいながらへている所を、  
 やれそこなといへばわが事が、くゝとぞんして十人の子共  
 がたちさわぐ程にかれらにめてたき名を付て御座あるよ」  
 「何と御付被成て候ぞ」「ものと付た」「何と付させられた」  
 「一 おとよ 二 けさよ 三 たつまつ 四 ふすまつ 五  
 たん 六 だら 七 ひなごに 八 かいつく 九 ひつつく  
 + ひうちぶくろと付て候」「一ツつゝゆびおりのラマツる」あらめてた  
 やさらはすゝをまいらせつ」「心得て候  
 シ 「三番神」(三番三 三日の型付と問答・田歌)  
 三日  
兼註してハ 右二日目とおなじことく大廻り二まハリしてつゝ  
 ミ打の前にてこまハリニツ 両袖打こミ候て左へ拍子に  
 て行 左へ 行小廻 二廻してさて左をおろし右へ大廻り一  
 ツ つゝミ打の前にて小廻りニツしてそこにて右の袖をる

し右へ行時拍子 右のそて返左へ大廻り つゝミ打の前にて小廻二ツして右の袖打こミ左へ拍子にて行 左の袖返し又右へまはり つゝミ打 前にて小廻り二ツして左のそて打こミ右へ拍子にて行 左へ小廻して左の袖おろし 又右へこまはりして右のそておろし左へ大廻り つゝミ打の前にて小廻して左のそて返し右へ小廻 右返し真中にてとめ同じごとく

「あらめてたやな ものに心得たるあどの大夫殿にそとげんざう申さう」「ちやうどまいつて候」「あどこぶ所にはやくとおたち祝着申て候 さる程にあどの大夫殿に申度御事の候」「それ八何事にて候ぞ」「別成事にてもありない そうして人に名をよばれたる八一段とうれしひものにて八なく候か」「中くの事 人に名をよばれたる八うれしひものにて候」「さあら八あどの大夫殿をよぶでまいらせうするが何と御座あらふするぞ」「近比満足にぞんずる いかやうにもよぶで給り候へ」「よぶともたゝ八よび候まじひ さ月のおりからさうとめのかさはをならべて田うたをうちあげてつたふたる八一段とおもしろきものにて候程に 田うたぶしにかかつて

よび申さうするが何と御座あらふするぞ」「近比にて候いかやうになりとも御よび候へ こたへ申さつ」「あとのや あとのあとのあとのや」「して何時にこたへ申さうするぞ」「おいてあさつてわたり<sup>(註)</sup>いらへ候へ」「さて八おそいとのお御ぶきようにて候か」「中くの事 おつつけて御いらへ候へ」「心得申て候」「あどのくあどのや あどのあどのあどのや あどのや」「なぞとよなぞとなぞとなぞ給へせう殿」「あどのくくくくあどの あどの あどのや あどのや」「何事にて候ぞ」「今日八めでたいよき天気にて八なく候か」「中くの事 やがてすゝをまいらせう」「心得申て候」

シ 「三番神」(三番三 四日の型付と問答・田歌・子宝)  
四日

初八初日のことく大廻二返、小つゝミ打の前にて小廻り二返、西そて打こみ左へ拍子にて行 左へ小廻り 左の袖をかへしよこに拍子ぶミ右へ大廻り つゝミ打の前にて小廻り二ツ 右へからす拍子にて行 右のそてをかへし左へ大廻り つゝミ打の前にて小廻り二ツ 右の袖打

こ三右へ小廻りして左のそでうちこ三左へぬき拍子にて  
行 左の袖返し右へ大廻り つゝ三打の前にて小廻り二  
ツ右へ拍子にて行 右のそでを返し左へよこに拍子少  
左へ大廻り つゝ三打の前にて小廻り二三返 両袖打か  
へしまん中へ拍子にて行 とめ同じごとく

一 「あゝおさへくおつ ようこびありや ようこび  
と云 ふミをえて重而しよちにぞくだりける共又のほり  
ける共云 下がゝり八のほりける

一 田うたのせりふ

「あどゝ申所にはやくとおたち まんぞく申て候」「さ  
うくおたちありたる所をたゞ八何とてをき候べき」  
「そつじて人によばれたる八一段うれしひものにて候間  
あどの大夫殿をよび申さうするが何とござあらふずる  
ぞ」「それ程に思召候ハゝまんぞく申て候」「さあらハい  
かやうにも御よび候へ ことへ申さうする」「是より八つねの  
ことく 田うたにてよび時、ひたゝれのつゆを取 あぶぎびやうしちやうと打よ  
ぶなり」「何事にて候ぞ」「近比めでたきおりからにて八候  
八ぬか」「中くの事 めでたきおりからなれば今日の  
御祝儀をめでたいやうに舞ふておりそひ ぜう殿」

是から初日のことくなり

一 子だから

「あどゝこつ所に早く御たち祝着申て候 初あどの大  
夫殿八何とおほしめし候ぞ」「日本のあるじハ めでた  
いあるじにて たうど天竺まで思召すまゝに納給へハ  
三国一のあるじ也 是と申も ぢひしんにまします故也  
それに依てたミはくせいに至るまでくわツけいくわんら  
くにほこる事 ひとへに君の御めぐミふかき故にて  
なんぼうめでたき事にて八候八ぬか」「中くぜう殿の  
御申のことく かミ一人の御めぐミにて上下ばんミンよ  
ろこぶ事なんぼうめでたき御事にて候 初又あどの大夫  
殿八何とおほしめし候ぞ 人間のしつちまんぼつの中  
ても子だからほとめでたきものハおりないとぞんずるが  
何と思召候ぞ」「仰のことく子程のたから有まじきの  
申事にて候 さる程に此いろのくろいぜうほどめでたき  
ものハ有まじく候 其子細八子を十人もちて候よ」「ま  
ことにそれハおほしめすまゝにて候間 ぜう殿ほどめで  
たき御かたハ有まじく候」「則かミ五人ハをしならべて  
なんし 下五人ハ女子なり 此十人の子共が、いながら

へて有る時に、やれそこなものよといへばわかことか  
 くと思ふて十人の子共がたちさわぐほどに一度に十人  
 をよぶやうに名を付て候」「何と御付なされて候ぞ」「ま  
 つす系からよぶやうに付て候」「何と」「おとよ けさよ  
 たつまつ いるまつ だん だら ひなごに かいつুক  
 ひつつく ひうちぶくろと付て候」「近比めでたう候  
 やがてすゞをまいらせう」「心得申て候」

シ 「三番神」(揉ノ段の心得)

一 子だからを云に子細有 すへからよぶにもいわれ有

口伝

一 小鼓たつとくと打に子細有 九よのほしをまな

ぶと也

一 ひたゝれの緒のむすびやうに口伝有

一 大ちゞみ小ちゞ見

一 ミだれびやうし ミだれあし

一 ぶむひやうし ふまぬひやうし

一 祝言、わたまし 神前 御前 門出 とむらい 調

伏 勸進能 何も心得習在也

シ 「三番神」(鈴ノ段の型付)

鈴之段の舞様

一 鈴左にて取 つゞみ打の方へ向て右へ取なをし 扇

ひろげ 向へむいてから 両の手をのばし上面に向ひ すゞふり

出し舞台の真中の通りへ出 跡へすさる時扇内へ返し前

に両の手をすほめ跡へすさり つゞみ打の前にて拍子ふ

ミ 左の方へあふぎ共に左の手をのばし三足行 右脇正

面の方へ向ひ 右ノ手ノパス 両の手ろくにミ合 ひろげて目

付の柱の方へ行 拍子ふミ左へ行 大臣柱の方にて拍子

ふミ左へ大廻に一返 つゞみ打の前にて小廻一返して扇

うしろへなし ワキノ方へ 三足行 拍子ふミ右へ大廻 中廻

二返 又鼓打の前にて小廻二返 真中へ出 脇座の方へ

向ひ拍子ふミ おもがへり一返して脇正面へ向ひ 扇を

本正面方へなし すゞハつゞみ打の方へ成ル 拍子ふ

ミおもがへり二返 以上おもがへり三返 かほゝなづる

も三度してつゞみ打前にて小廻一返して拍子ふミ 左の

袖返し右の袖かへしくるくと二三遍小廻してとめ候時

鈴いたゞく也



一、舞納て面箱の方へすゞ上に置 面ぬぎ面に向ひ神道  
有 面渡し候時八右のひざをたてゝ其足をそのまゝひら  
き 楽やの方へ向ひ 立ていり候 色々口伝

一 鈴いたゞく時心持有

一 三段のおもがへりの足に口伝

一 顔をなづるに子細有

一 三番三の「おさへくあふ よろこび有や 我この

所より外へ八やらじとぞ思ふ」と云にせつゝ多し 中

く筆に八難及

一 式三番の事 神道之奥義ナレハアザくシクワカヲ

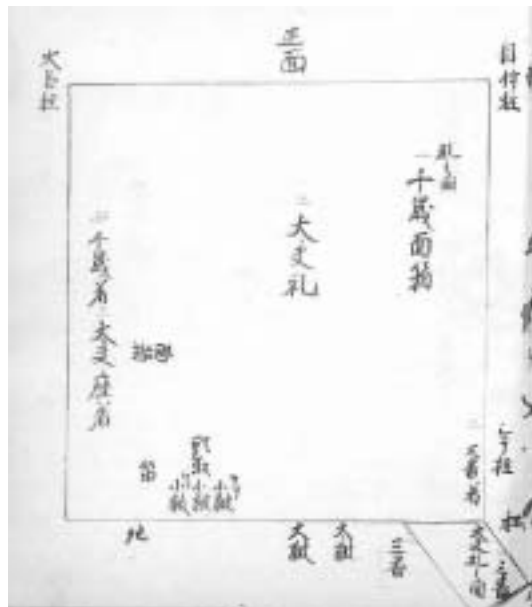
シルサズトイエドモ大方是書頭事代々昔從八大事ナレ

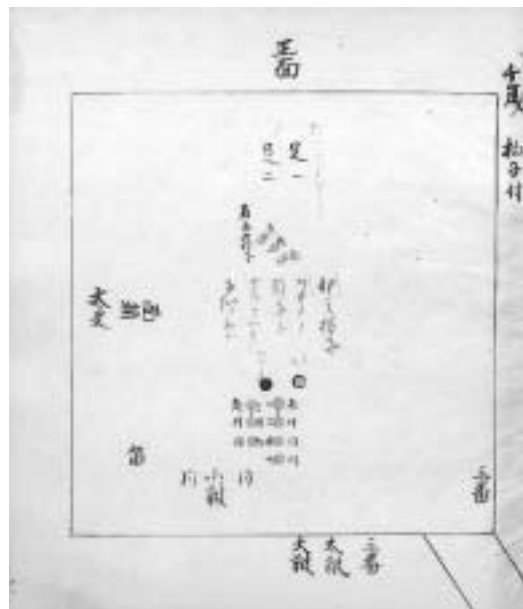
八口伝云 右之条々一子之外相伝於在之者必神罰可

蒙者也

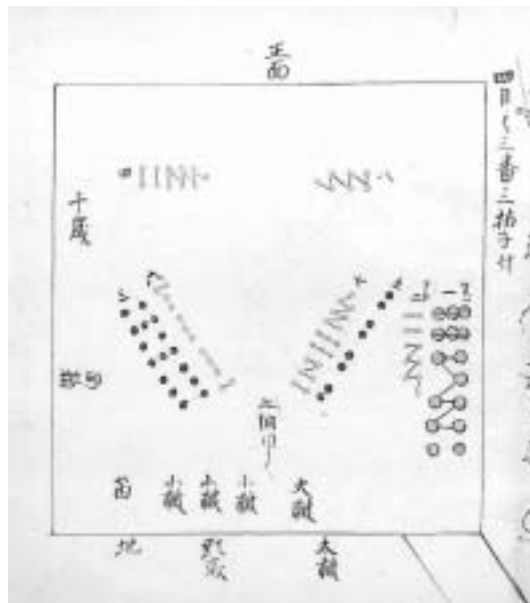
又 仕舞付（「式三番」の絵図・心得）

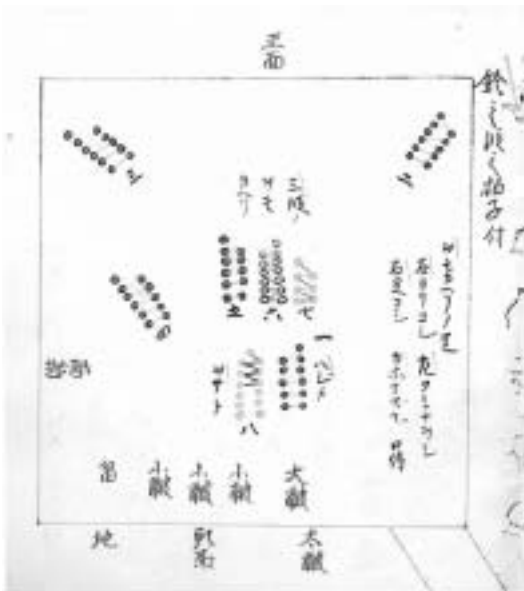
一 式三番の絵図 拍子付並次第











- 一 勸世方之時は千歳大夫之跡ニ付入ル 面箱持残り鈴渡シ
- 三番ニ之跡ニ付 鈴之段過テ入
- 一 今春方之時ハ鈴渡シ千歳入故ニ 鈴之段ノ時は千歳不届
- 一 拍子ノ数定リ候 九星七星三星トテ大事ノ習有リ
- 一 三日ノ三番三章信行ト心得シ 初日ハ草 二日ハ信 三日ハ行 但シ当代ハ勸進能モ四日ニ定ル故ニ四日目ヨ行ト心得ハシ
- 四日目ノ三番三初日ニ帰ル故ニ初日ノ三番三ノ替ハ舞也
- 一 橋カヽリ八能ツヽメタル時ニ可舞也



一 右ノ破軍ヲ胸ニ持テ可舞事肝要也 口伝

セ 諸大事（《翁》の異式演出）

千歳生し所を云て翁舞たる者 父丞ノ面をきて

父丞舞様

いゝ 一 てんに風おさまつて民古今のたのしみにはこり  
 さればあめつちひらきはじまつて かんはずすいそんのおそれさらになし しかれば生々世々よるこびのミあつてまことに目出度翁なり 下 そよやよわひに八く松をばねながらこそ 地 えだをこそふれありうどう

〈 一 扇をひろげ一へんまハリ左へ扇をとり右の袖うちさし二扇は共にまきへ出す 千歳ノことくノとめ也 鼓ノうちやうせんだいのこくく〉

此次二つのまひ

いゝ けふもさすがにてんわうせいしゆの御代なれば  
 おどり 山河草木まいたりやくさつくくく 〔右におり 太鼓もちてうつ也〕

十一月 立合の時翁二人

座していたれ共まいらふれんげりやとんとや これまてつねの翁也

やいぜつとつのに申へき事の候

〔ちんやがの 神ノひらひらちてふらふしかれ

とそぢいあ そぢやういぢやとんとや〕 そもやうもなんのでう事にて候ぞ 〔

かゝるめてなきに八 十二月のわうらいこそ誠にめでたう候へ

尤めでたう候 正月の松の風 きんのことをしらべたり

二月のつばめ 東なり い八ひをはやめたり 三月のか

すみ 四方の山にたなびく 四月の郭公 所に吉事

つげわたる 五月のあやめ草 玉の御殿をふきかざる

六月のあふぎ とくわか風を出す 七月のせみのこゑ

梢にうたふたり 八月の雁金 ほつじやうゑにまいる

九月の菊の花 御はうほつやくの御薬となる 十月のき

たしぐれ 木のはをそめわたる 十一月のあられ ふど

うのしらげにことならず 十二月の氷 ますかゞミ さ

いしやうほつはう 並北方 やうがんびすい しまこ

んじき 十を拾(八十ゆがこ) 百をひやく 千

を千 まんを万 御調のたからをかぞ

へてまいらせう翁ども 地 あれはなぢよの翁共 そや

いづくのおきなとも つね翁也

わが宮のミヤのく二柱 秋くさ八むすぶばかりになり

にけり いざきりくす 衣かへさんいざく衣かへさ

ん 白きふくめんまへたれて、本八もと八大小つミ打もふくめんなり

セ 諸大事(五行説主体の《翁》説)

両眼 ハ 金胎両部ノ大日也。両耳ハ釈迦多宝二仏也

鼻ノ二穴ハ普賢文殊ノ二菩薩。口ハ阿字 舌ハ蓮華

ノ一葉 七穴ハ七菩薩 陰相命根ノ二穴ハ阿吽ノ

二字合シテ九穴ハ九品ノ浄土也 左ノ手ハ東方大

圓鏡智ノ阿闍仏也 右ノ手ハ西方妙觀察智ノ阿弥

陀仏也 右ノ足ハ南方平性知宝性仏ナリ 右ノ足ハ

北方成所作智ノ釈迦也 腹ハ中央法界体性智大日如

来ナリ 如是五智依身名法界空王道場ナリ 故ニ即心

成仏通身一仏ノ法花者人々一身ニ納タル法花一仏法

華文字六万九千三百八十余字也 六万ハ六根、九千ハ

九穴、三百ハ貪瞋癡、八十八ハ八分ノ団圓、亦八識ノ

田地、四字ハ手足ノ四也 又行住坐臥也 故ニ通身一仏ノ

法花也 故ニ我カ面前ハ文殊、背後ハ普賢 身ハ

釈迦也 故ニ畢竟空五尺ノ全躰ハ一部ノ法花也

抑真言秘密尋者仏法隨喜徳益也 信心大施主供具備、

陰陽師供養敬白、散供再拜々々

謹請東方降三世夜叉明王、五形六根守護給。謹請南方軍荼利夜叉明王、五形六根守護給。謹請西方大威德夜叉明王、五形六根守護給。謹請北方金剛夜叉明王、五形六根守護給。謹請中央大日大聖不動明王、五形六根守護給。惣而八万四千六百五十余神等敬白、夫以二十八宿、地三十六禽、日月星宿下生、為罪於造事不斷也。故第六天之魔王、惡鬼、惡靈、死靈、荒神、行疫神、何成荒御崎成共、我身五智五仏也。争妨於給へキヤ。之依仏曰、天地ノ二法ヲ見テ天ト者陽也。天地和合而五形ヲ造。此五形者則木火土金水、五智五仏五形五味五色五臟五腑ノ龍王也。依之仏曰、人ノ身ハ而身非、天地和合シテ八万法蔵之源也ト説給也。達磨大師説ニ云人身ハ身而身非。法報心ノ三身ノ如來也ト説給。伝教大師尺三曰々妙法蓮華經之五字ヲ以テ人間之身ヲ造也。右ノ手二十四ノ次節、左ノ手二十四ノ次節有。是即法花経之二十八品也。去者三世ノ諸仏モ左右ノ手ヲ以テ禮拜シテハ必納受垂給也。凡文字數ハ六万九千三百八十四字也。華嚴阿含方等般若法花、涅槃淨土ノ三部経等ニ至迄、文字ノ數八人ノ身ノ毛ノ數ヲ表シ給。其ニ依翹翹鬼神惡鬼惡靈呪詛怨敵、何成渡神山神水神土公神荒神ノ御崇ナリトモ妨ヲ成給ヘカラス。弘法大師ノ説ニ云、諸法ヲ、シトイエトモ十界ニハ越不。十界ト者一ニハ地獄界、二ニハ餓鬼界、三ニハ畜生界、四ニハ修羅界、五ニハ人間界、六ニハ天道界、七ニハ声聞、八ニハ縁覺界、九ニハ菩薩界、十ニハ仏界也。或者大荒神小荒神村荒神ナリトモ崇ヲナスヘカラス。然ニ人間五臟有リ眼者、肝臟東方薬師如來、醋味種ト為。春三月甲乙刀卯ノ方、青竜王青色ト現シ、舌ハ心之臟南方宝生如來苦味ヲ種トシ夏三月丙丁巳午方赤竜王赤色ト現、鼻者肺臟西方阿弥陀如來、辛味種トシ秋三月庚申申西白竜王白色ト現、耳者腎臟者北方釈迦如來、鹹味種トシ冬三月壬癸亥子ノ方黒竜王黒色ト現。口ハ脾臟中央大日如來、甘味種トシテ戊巳丑未辰戌黄竜王黄色ト現給。亦此故何成呪詛靈氣成共、崇ヲ成ヘカラス然ニ五調子有。甲乙刀卯ハ双調丙丁巳午ハ黄涉調。虎辛申酉ハ平調。壬癸亥子ハ盤涉調。戊巳丑未辰戌ハ一越調。又眼ハ東方阿閼仏木玉ト現シ給。舌ハ南方觀世音菩薩火神トケンシ給。鼻ハ西方阿弥陀如來釜神現シ給。耳ハ北方不空成就仏水神ト現シ給。口ハ中央大日如來土用トケンシ給。東方ハ大圓鏡智降三世夜叉明王金剛部五古ノ印ニテハ字ヲ誦シテ肝臟ヲ加持シ給



南方ハ平等性智軍荼利夜叉明王、宝形ノ印ヲ以テ、字ヲ誦シテ心臓ヲ加持シ給。西方ハ妙觀察智大威徳夜叉明王蓮華部八葉ノ印ヲ以テ、字ヲ誦シテ肺ノ臓ヲ加持シ給。北方ハ成所作智金剛夜叉明王、羯磨ノ印ヲ以テ、字ヲ誦シテ腎臓ヲ加持シ給。中央ハ法界毘性智大日大聖不動明王、般若部五古ノ印ヲ以テ、字ヲ誦シテ脾臓ヲ加持シ給。故ニ人間ノ体ト者モ、眼耳鼻舌身、意是也。然ハ一万三世諸仏ミミナ是座給ト力チシユカ也。又人ノ身ニハ大骨小骨アリ大骨ト者一年十二月ヲヘウシ給。小骨ト者二百六十日ノ星宿ヲヘウシ給。身皮ト者草木ヲ表シ給。惣体ト者金色ナリ。血ト者水也。筋ト者草木也。肉ト者土ナリ。火トイウキハ風也。依之地水火風空木火土金水コレナリ。草木ト者衣食ト成テ五体ヲ作也。白骨ハ父ノ孀、赤肉ハ母ノ孀、赤白ニ諦和合シテ、五体身分トナル。依之父ハ金剛界ノ大日如来五百余尊也。母ハ胎臓界ノ大日如来七百余尊也。惣体一千二百八尊也。身骨ト者北方釈迦如来ノ五百大願也。在皮ト者東方薬師如来ノ十二大願也。在毛ト者南方觀世音菩薩三十三身トケンシ給。筋ト者西方阿弥陀如来ノ四十八願也。在肉ト者中央大日如来五智五仏ヲヘウシタマ

ウ。又頭ノ円事ハ天ヲ表シ、足ノ方ナル事ハ地ヲ表シ、両眼ハ日月ヲ表シ、耳ハ北斗七星ヲ表シ、身毛ハ草木ヲ表シ、腹ノアタ、カナル事ハ春夏ヲ表シ、筋骨ノコウキ事ハ秋冬ヲ表シ、カクノコトク五臓五智五仏ノ如来八万四千六百五十余神トケンシタマイテ、身ヲ守護セシメ給也。東方降三世夜叉明王、南方軍荼利夜叉明王、西方大威徳夜叉明王、北方金剛夜叉明王、中央大日大聖不動明王、惣体六根付テ今ヨリ後ニ何物ヲ来テ崇テ成スヘカラス。疾々ハナレタマ乙七難即滅七福即生家内安穩富貴自在急々如律令

翁無取不至之印 金剛合常大事

一 右ノ五指ハ仏界ノ五大五智ナリ  
 一 左ノ五指ハ衆生界ノ五大ニシテ即チ我ガ五大ニシテ五智ナリ。合シテ不二取ハ生仏不二邪正一如ノ内證ナリ。故ニ衆生即仏ト可思ト云云

無取不至之印ノ大事

一 先地水火 三指 左右ヲ合スルハ則チ六大無果ノ内證 頭指ハ大指左右ノ端ヲ合スル 四種万ダノ肝心 中ニ三六ハ三三

ツ加持ノ表示ナリ 故ニ真言ニライテモ此印ヲ以テ植秘トスルナ  
 リ 又結ニ口伝有

一 先左右之地水火ヲ合スル時

六六無碍常瑜伽ト唱頭大之四指ヲ合スル時

四種曼荼各 不離ト唱、中指ノ三穴ニ当テニ密加持

速疾頭ト唱

六六四万ニ密具足スルト視シテ、重々帝相各即身ト唱

此印ヲ以テ凡身即灌 頂ノ大事ニ此印明ニテサツクルナリ。

口伝重々又此印ニ開塔閉塔ノ習ヒシモ、開ラカイ塔ト云、閉ラ

ヘイ塔ト云也。自説ニ是ヲトテ、他ニ是ヲ開ル。習ヒ真言一

大事ノ相伝ナリ。

S 四座立合の次第

四座立合翁

千歳延命くわんしや

あとの役 ちくのせう

一 翁四人わきの能より云かけ残三人のこたへ

一 千歳八能の次第に告人ノ立舞なり

一 三番三 三番目に付

一 あとの役 四番目に付

一 延命冠者 二番目に付

一 ちくのせう 脇能に付

一、二座立合

一 千歳 三人能の次第に一人ツノ立舞なり

一 翁三人 必右脇能より云かくる

一 三番三 二番目に付

一 あとの役 三番目に付

一 延命くわしや 是も三番目に付

一 ちくのせう 脇能に付

一、二座立合

一 千歳二人 右同前立舞

一 翁二人 脇能より云かけ

一 三番三 脇能に付

一 あとの役 二色共に二番目に付

一 延命くわしや

一 ちくのせう 脇能に付

一、一座能つねのことし

一 笛八翁の内四座三座二座共に四人ともに出てふく

一 千歳の内八其能の次第のことく

一 ちくのせうの内八脇能のものふく。三番三笛八何も  
三番三舞座へ付也

一 四座立合へ八式三番 三番目へ付

一 三座立合へ八式三番 二番目へ付

一 二座立合へ八 脇能へ付

一 四座立合 脇能八今春

一 式三番太鼓三番目へ付。笛も同前。

一 二日目脇能八金剛 同式三番笛太鼓二番目へ付

一 今春金剛観世宝生と四座三座二座共に脇能共に次第  
ぐり

一 四座立合にても三座立合にても面箱其太夫の数ほど

出申候 千歳も面箱の数ほど出申候 千歳目付の柱の方

になをり千歳舞をさめ候て笛吹の方へ一人く其次第に  
なをり申候

但三番三舞もの八千歳舞候て太鼓打の方いつもの所に  
なをり申候、千歳の笛一座くのものんくにひしき申  
候也

右和州多武峰よりはじまり同奈良春日の御神事新御祭  
如此。其外何方にても立合の時ハ 如右也

一、スジニサツくト云事神代ニ鈿女竹ノハヲフリ玉フ  
ユヘサ、ト云儀ナルベシ 天台ニマタラ神ノワキタチニ  
サ、ノハヲカダゲ申モ此イハレナリ。

大倉弥太郎

虎明判

[ Summary ]

Report on “ Shikisanban ” written  
by Okura Tora-akira

TAKAKUWA Izumi

I have deciphered “ Shikisanban ” written by Okura Tora-akira, a famous *kyogen* player of the Okura school acting in the early Edo period. In this writing, interpretations of *okina* from the viewpoint of Shintoism, various dialogues between Sanbaso and Senzai (dancers who give blessing to mankind in Okina), and Sanbaso's way of dancing are mentioned. This writing shows that Okina, one of the oldest repertoires performed since the Kamakura period, was given overtones of Shinto religion from the modern period. This provides valuable data on performance of Sanbaso in early Edo period.

“ Shikisanban ” has been handed down to Mr. Yamamoto Tojiro, a *kyogen* player of the Okura school.